加茂遺跡と武庫庄遺跡の比較検討について

髙梨政大
尼崎市教育委員会事務局歴史博物館　学芸員

１　はじめに

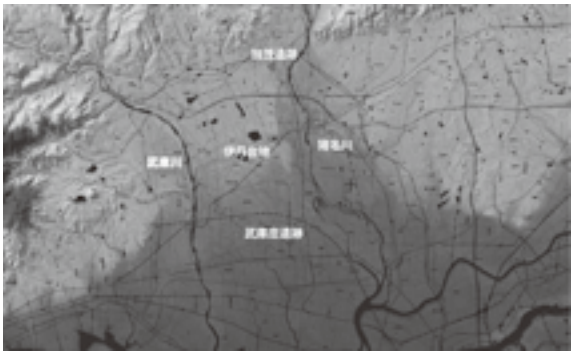
弥生時代において川西市の加茂遺跡は西摂を代表する畿内でも有数の大規模集落である。これまで発掘調査等で得られた成果から、おおむねの集落の様相がわかりつつある。本稿では同じ伊丹台地上に時期を同じくして成立していた尼崎市の武庫庄遺跡の様相について言及し、それぞれの発掘調査の成果を踏まえ、両遺跡を比較検討する。

２　遺跡の概要

加茂遺跡は兵庫県南東部の川西市南部に位置し、西摂平野部を流れる猪名川を東側に見下ろす標高約40m の伊丹台地の北東端部にある旧石器時代から平安時代にかけての遺跡である。台地の東側崖下から銅鐸（栄根銅鐸）が出土し、鴨神社周辺において弥生土器や石器が散布することから遺跡の存在が明らかになった。昭和27年から29年（1952～1954）に関西大学、関西学院大学が初めて発掘調査を実施し、その成果を昭和43年（1968）に「摂津加茂」として報告された。平成４年（1992）に方形区画を伴った大型掘立柱建物、平成６年（1994）に斜面環濠等の重要遺構の検出が続き、平成12年（2000）に鴨神神社及び周辺が国史跡に指定された。遺跡の範囲は最も盛行した弥生時代中期で東西800m、南北400m の広さを誇ると考えられ、畿内でも有数の大規模集落である。

第１図　伊丹台地と武庫庄遺跡（土地条件図）

武庫庄遺跡は兵庫県南東部の尼崎市北部に位置し、西に武庫川を望む標高約８～9m の伊丹台地の舌状に突き出た南端部にある弥生時代から鎌倉時代にかけての遺跡である（第１図）。戦前よりかなり広い範囲にわたり、弥生土器・石器が採集されていたが、遺跡の存在が明らかになったのは区画整理事業に伴う昭和46年（1971）の第１次調査からである。その後、宅地造成等に伴う発掘調査等で、平成８年（1996）に方形区画を伴った大型掘立柱建物、平成16年（2004）に大型井戸等の重要遺構の検出が続いた。また、武庫庄遺跡は隣接する道ノ下遺跡、南戸板遺跡を含めた広い範囲が遺跡の大きさであるとわかり、現在ではそれらの遺跡を含めて取扱うのが適当であると考えている。武庫庄遺跡の範囲は最も盛行した弥生時代中期において東西400m、南北600m の広さを誇ると考えられ、加茂遺跡と同じく畿内でも有数の大規模集落であ


第２図　伊丹台地と遺跡位置

ることがわかった。

遺跡の立地としては加茂遺跡と武庫庄遺跡は同じ伊丹台地上の端部に位置し、東側に猪名川、西側に武庫川によって隔てられている同一の台地上に存在していることがわかる（第２図）。

3　加茂遺跡と武庫庄遺跡の主要遺構の配置

加茂遺跡は東部に集落の主要施設と考えられる板塀で囲まれた大型建物と居住域があり、西部に方形周溝墓などの墓域がひろがっている。また集落の中心部には数条の環濠がとりかこみ、環濠の外側にも居住域がある（第３図）。加茂遺跡がある台地の周辺には同時期に存在した栄根遺跡、下加茂遺跡、小戸遺跡などの小集落も存在し、加茂遺跡とともに稲作農耕、交易などを共にする地域社会を形成していたと考えられている。なお、加茂遺跡の最盛期は弥生時代中期で、後期になると遺構・遺物量が減少していくことから、集落が徐々に縮小、解体していったと推測できる。

第３図　加茂遺跡集落の構成と主要遺構
（弥生時代中期）

一方、武庫庄遺跡は遺跡の中央部より、やや南側に集落の主要施設と考えられる板塀等で囲まれた方形区画、大型建物、大型井戸が存在している。方形区画の周辺部に居住域がひろがっていたと考え、方形周溝墓などの墓域は南北方向にひろがる形で、集落の西部で多く検出されている（第４図）。

なお、武庫庄遺跡の最盛期は方形区画に囲まれた大型掘立柱建物が存在した弥生時代中期中葉から後葉である。弥生時代後期の遺構については今日まで実施された発掘調査等において土坑２基が確認されているが事実上ほぼ皆無という状況である。後世の田畑造成に伴う土地の削平を激し

第４図　武庫庄遺跡と周辺遺跡の主要遺構配置図

く受け、遺物包含層が削り取られていることもあるが、弥生時代後期初頭までには急速に集落が解体していったと推測できる。

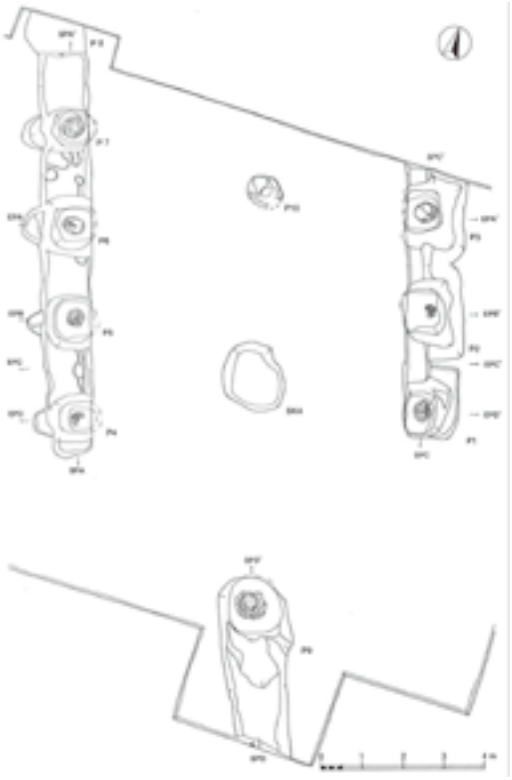
4　武庫庄遺跡の大型掘立柱建物

平成８年（1996）に実施された武庫庄遺跡第36次調査（第５図）で検出された大型掘立柱建物は、梁間１間、桁行４間以上の独立棟持柱を持つ建物である（第６図）。N―16.5°―Eに桁方向をとり、梁間方向の柱間は8.6m、桁行方向の柱間は2.4mを測る。布堀状につながった状態で確認され、柱は直径約50cmの円柱で柱根が検出された。遺物としては弥生時代中期中葉（Ⅳ―１・２）の弥生土器片が出土した。

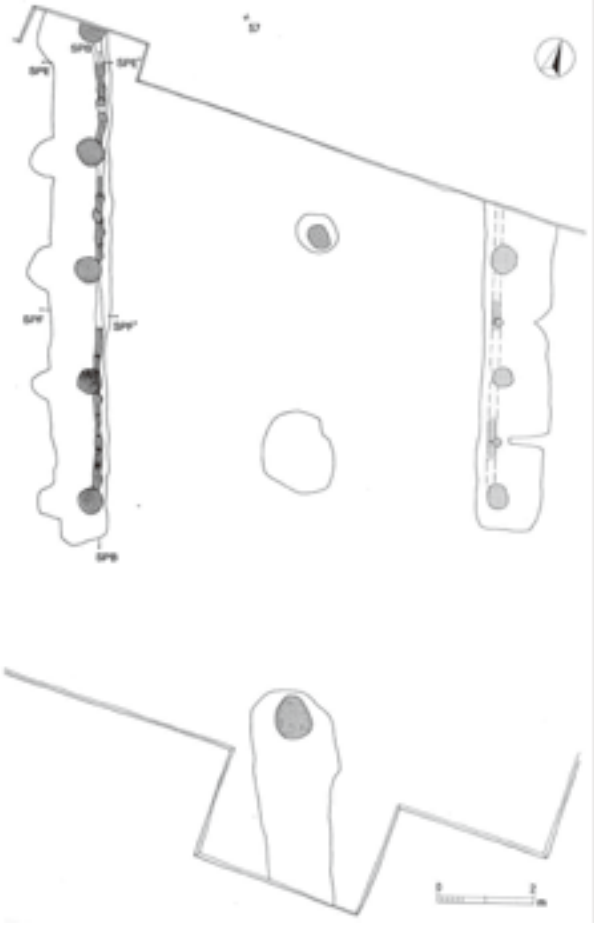
この大型掘立柱建物で最も注目される点は、柱と柱の間に幅30～40cm、厚さ15cmの板材を立てていた痕跡が検出されたことである（第７・８図）。

建物の西側には約8m離れた位置に建物桁行と並行して延びる方形区画の痕跡が存在し、この方形区画に用いられた板塀等の区画物とあわせると、建物内部が見えないように二重の遮断物を施していたと考えられる（第９図）。また、この建物の独立棟持柱の出は4.6mを測り、現在確認されている弥生時代中期の独立棟持柱を有する建物の中で最大の出をもった建物である。独立棟持柱の直径は約80cmを測るが土層断面の観察から約95cmの直径があったと推測することができる。この大型掘立柱建物は北半部が第36次調査の調査区外にひろがっていたため、建物の全容をつかむことができなかったが、弥生時代中期の最大級の建物であることが推測される。

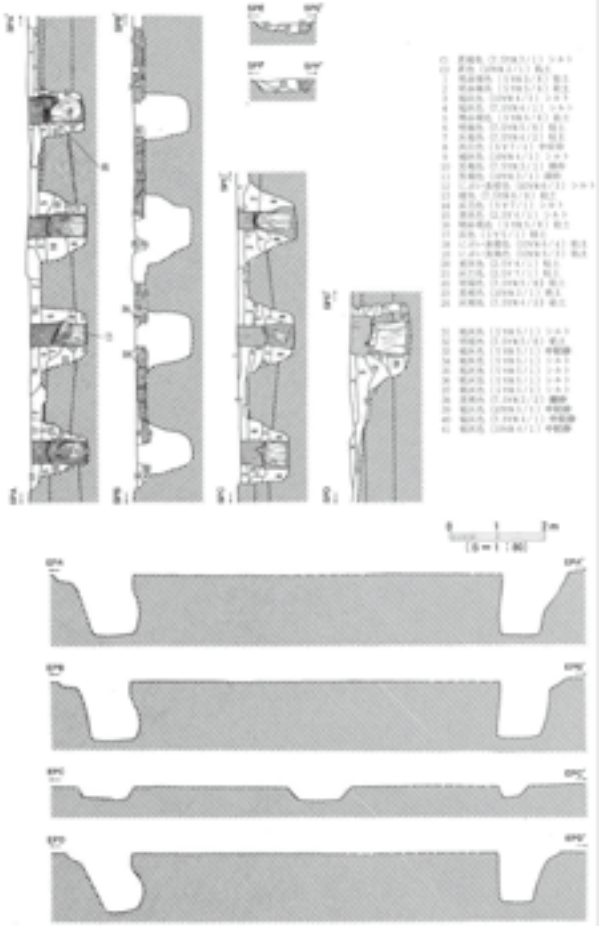
第５図　第36次調査　遺構平面図



第６図　大型掘立柱建物（SB6）平面図



第 7 図　大型掘立柱建物（SB6）検出状況図



第 8 図　大型掘立柱建物（SB6）土層断面図

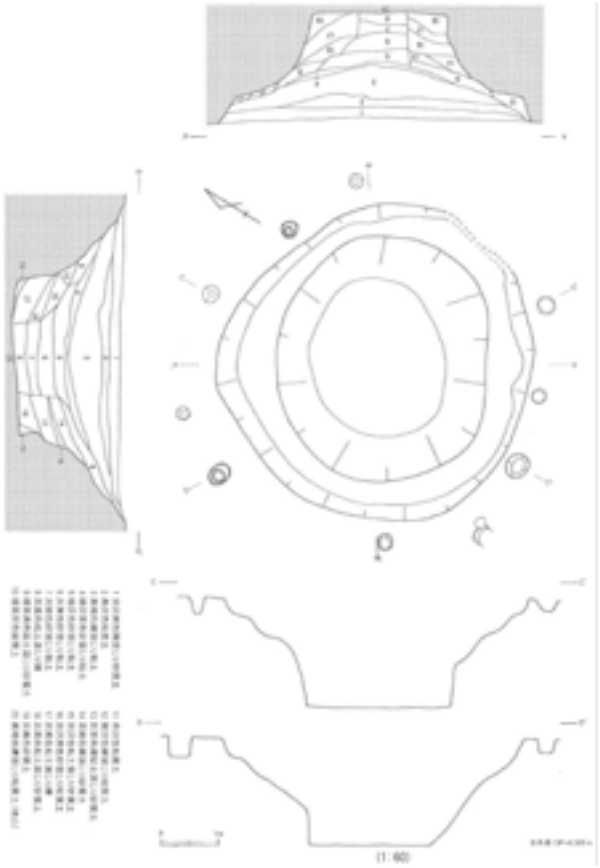
第 9 図　大型掘立柱建物想像図

5　武庫庄遺跡の大型井戸

平成16年（2010）に実施された武庫庄遺跡第74次調査（第10図）の南東隅で検出された大型の井戸。第36次調査の大型掘立柱建物から東へ約50mの地点となる。上段掘形の平面形は径約5.5mの円形で、検出面から深さ50cmのところで幅20～60cmのテラス面を作りだし、下段では長径4.2m、短径3.6mの楕円を呈し、深さ1.8mを測る。井側そのものを検出することはできなかったが、埋土の断面観察から長径1.2m、短径0.9mの井側が存在していたと考えられる。なお、井戸の周りには径約30cmのビットが10基、取り囲むように検出され、井戸には屋根を伴った覆いがあったと想定される（第11図）。また、遺物としては弥生時代中期後葉（Ⅳ―３・４）の弥生土器が出土しており、第36次調査で検出した大型掘立柱建物と若干の時期差が生じている。

当時の発掘調査時の思い出として、井戸は埋土掘削時、完掘時においても清涼な水がコンコンと湧き出ており、集落内の水脈がこの周辺にあった可能性が非常に高い。井戸の大きさから集落全体で日常生活に使用した共同の井戸なのか、集落にとって大切な儀式等に使用した井戸なのか、井戸としての役割は不明であるが、大型掘立柱建物がある方形区画内に存在している。

第10図　第74次調査　遺構平面図



第11図　大型井戸　平・断面図

6　武庫庄遺跡の方形区画

武庫庄遺跡で初めて方形区画と考えられる溝が検出されたのは第36次調査である。大型掘立柱建物の西側約8mの地点で大型掘立柱建物の桁行方向と平行するかたちで検出した。溝はN―16°―Wの方向に延び、断面は逆台形を呈している。埋土の状況から板塀があったと想定されている。

また、第74次調査でも方形区画と考えられる溝が検出されている。第１次調査で検出された溝と

規模、方向が同じで一連の溝と考えられ、N―32°―W の方向に延び、大型掘立柱建物を囲む方形区画の東側と想定される。しかし、溝上部の削平が甚だしく、埋土から板塀の痕跡は確認できなかった。一方、大型掘立柱建物から南に約40m の地点で東西方向に延びる溝を検出している（第48次調査）。溝埋土から板塀があった痕跡があり、南側の方形区画の板塀と推定される。なお、北側については発掘調査等で確認されていない。

7　武庫庄遺跡の方形周溝墓

武庫庄遺跡の墓域は集落の東側にひろがっている。平成12年（2000）に実施した武庫庄遺跡第58次調査では北西―南東方向に主軸をもつ方形周溝墓が９基検出され、平成20年（2008）に実施した武庫庄遺跡第92次調査では北西―南東方向に主軸をもつ方形周溝墓が５基検出された。いずれも同一方向に主軸を持つ。これらの方形周溝墓の墳丘の大きさは一辺3.5m から6.0m、周溝の幅は0.7～1.4m、深さは７～35cm を測り、平面形は隅丸方形を呈しているものがほとんどである。なお、周溝を共有している方形周溝墓も存在している。

武庫庄遺跡で注目される方形周溝墓は平成５年（1993）に実施された武庫庄遺跡第22次調査で検出した方形周溝墓である。検出した位置は大型掘立柱建物を検出した第36次調査の西、約40m の地点である。北西―南東方向に主軸を持ち、墳丘の大きさは長辺約12m、短辺10m、周溝の幅は1.0～1.7m、深さは20～60cm を測る。平面形は隅丸方形を呈している。墳丘の封土は後世の削平により残っていなかったが、中央部の主体部において木棺の底板が残存していた。この方形周溝墓は集落の東側にある方形周溝より明らかに大きく、大型方形周溝墓と位置づけられる。

8　加茂遺跡との比較

加茂遺跡と同一の伊丹台地にある武庫庄遺跡について考察してきたが、ここで弥生時代中期の集落の特徴を踏まえ、比較検討をおこないたい。

加茂遺跡と武庫庄遺跡を比較して得られた共通点は以下のことがあげられる。

① 集落は小高い台地の端に位置し、自然の地形を上手く利用し、背後に大きな河川を有し、沖積平野を望める位置に立地している。

② 集落の規模は畿内でも有数の大規模集落である。

	加茂遺跡	武庫庄遺跡
立地	・伊丹台地の北東端 ・背後に猪名川がある ・近くに沖積平野が広がっている	・伊丹台地の南端 ・背後に武庫川がある ・近くに沖積平野が広がっている
規模	・東西800m、南北400m ・大規模集落	・東西400m、南北600m ・大規模集落
集落最盛期	・弥生時代中期	・弥生時代中期
集落解体期	・弥生時代後期から**徐々に進む**	・弥生時代**後期初頭には解体**している
防衛機能の有無	・自然の要害と呼べる小高い台地上に位置する。 **・環濠が存在する。** ・自然の谷状の地形を利用している。	・自然の要害と呼べる小高い台地上に位置する。 **・環濠は存在しない。** ・自然の谷状の地形を利用している。
居住域の構成	集落中心域居住区と環濠外の南・北居住区に分かれている。	方形区画の外側に居住域がひろがっている。
墓域の在り方	集落の西部にひろがっている。	集落の東部に明確に分かれている
重要遺構	**方形区画** **大型掘立柱建物** 大型方形周溝墓 **環濠** **斜面環濠**	**方形区画** **大型掘立柱建物** 大型方形周溝墓 **大型井戸**

③　墓域と居住域が分かれている。
④　方形区画、大型掘立柱建物、大型方形周溝墓等の重要遺構を有している。

加茂遺跡と武庫庄遺跡を比較して得られた相違点は以下のことがあげられる。
①　集落の解体スピード。
②　環濠、大型井戸、大型掘立柱建物の独立棟持柱の有無、
③　方形区画の大きさの違い

大型掘立柱建物　南から（武庫庄遺跡第36次）

大型井戸　南から（武庫庄遺跡第74次）

9　まとめ

今回は加茂遺跡と武庫庄遺跡を比較検討することにより、おおまかな西摂の弥生時代中期の大規模集落の在りようについて考察できたと思う。しかし、方形区画の大きさ、範囲など検討すべき課題も生じたことから、両遺跡の発掘調査成果を待たなければならない。

また、今回は加茂遺跡に焦点をあてるべく、同一台地、同時期に盛行した武庫庄遺跡との発掘調査成果を踏まえた比較に終始したため、弥生社会全体における中期の大規模集落の在りようについて論じるまでには至らなかった。それらの検討については諸賢に譲りたい。筆者の記述に理解しにくい点が多くあると思うが、ご容赦願いたい。

文　献

川西市教育委員会　1982「川西市加茂遺跡―市道11号線建設にともなう発掘調査報告」
川西市教育委員会　1988「川西市加茂遺跡―第81～83・85～91次発掘調査報告」
川西市教育委員会　1994「川西市加茂遺跡―第117・125次発掘調査概要」
川西市教育委員会　2016「史跡加茂遺跡　保存活用計画書　概要版」
尼崎市教育委員会　1996「尼崎市埋蔵文化財調査年報　平成４年度」
尼崎市教育委員会　1999「平成８年度国庫補助事業　尼崎市内遺跡　復旧・復興事業に伴う発掘調査　概要報告書　武庫庄遺跡　第36次調査」
尼崎市教育委員会　2008「尼崎市埋蔵文化財調査年報　平成10年度（2）・11・12・13・14年度―尼崎城跡第63次、生津遺跡第２次、武庫庄遺跡第58・60次、塚口城跡第94次、塚口山廻遺跡試掘・第１次調査概要―」
尼崎市教育委員会　2013「尼崎市埋蔵文化財調査年報　平成19年度・20年度（1）―武庫庄遺跡第92次調査、猪名

寺遺跡第１・２次調査の概要―」
尼崎市教育委員会　2010「尼崎市埋蔵文化財調査年報　平成16年度―東富松遺跡Ｂ第14次調査、武庫庄遺跡第74次調査他、概要―」